

対人援助職の「寄り添い」が印象形成に与える影響¹

——場面想定法を用いた予備的検討——

井川 純一・中西 大輔・前田 和寛
河野 喬・志和 資朗

(受付 2016年9月27日)

要 約

本研究では、対人援助職の「寄り添い」が他者にどのようなイメージを与えるかを場面想定法実験で検討した。実験参加者は、対人援助職がクライアントに支援を行う場面について記述された短文シナリオを読み、それぞれに対して印象評定を行った。シナリオは、語句条件（統制／寄り添い／一生懸命）と転帰条件（支援の結果：ポジティブ／ネガティブ）を変化させた6種類作成した。多変量分散分析（MANOVA）を行った結果、語句及び転帰の主効果が認められた。これらの結果から、クライアントがネガティブな転帰を迎えた場合には、援助の内容にかかわらず、対人援助職の印象が悪くなる一方、「寄り添い」という用語を使用することで、個人的親しみやすさを向上させることが明らかとなった。

キーワード：寄り添い、イメージ、対人援助職

「寄り添い」は、援助者がクライアントに対して、一定の心理的なコミットメントを持って関わることを意味する用語である。本研究では、この「寄り添い」が他者にどのようなイメージを喚起するかを検討することを目的としている。

近年の対人援助現場では、優位な立場からクライアントに対して指導や治療を与えるという従来型のパターンリズム（Dworkin, 1972）から、クライアントの立場に立ってその主体性を支える援助協働的意思決定モデル（Charles, Gafni, & Whelan, 1997）やナラティブベースドアプローチ（Greenhalgh & Hurwitz, 1998）への転換が求められている。一方、対人援助の多くは質的な業務であり、その効果を実験や調査で定量的に確認することが困難な分野でもある。ウェルビーイングの考え方に代表されるようにクライアントの持つニーズは多様であり、クライアントがどのように自らの生活を自己決定していくのかは答えのない問いであるからである。このジレンマから臨床現場に従事する対人援助職は日々の業務の経験的蓄積を言語化する際に、さまざまな抽象的な用語を使用する。その代表的なものが「寄り添い」である。

「寄り添い」という言葉を辞書的な意味で言えば「ぴったりとそばによる」（広辞苑第4

1 本論文は、本研究は JSPS 科研費 16K04283 『寄り添いをキーワードとした援助者——クライアント関係におけるフレームワークの構築』の助成を受けたものです。

版, 1991) であり, 元々は, 夫婦関係に代表されるように物理的にも精神的にも結びつきの深い対等な相手を対象とし, それを支えることを意味する表現であった。学術情報ナビゲータ CiNii を用いて, 学術論文内に使用される「寄り添い」の経年変化を検討した先行研究(前田・中西・井川・河野・志和, 2013)によると, 医療福祉や教育の場面で, この「寄り添い」という用語が頻繁に使われるようになった時期は, 前述したクライアントへの主体的アプローチの導入と時期を同じくし (e.g., 「患者に寄り添う医療」, 「思いに寄り添う看護」, 「子供の成長に寄り添う教師」), その使用頻度は近年急激に増加している (Figure 1)。

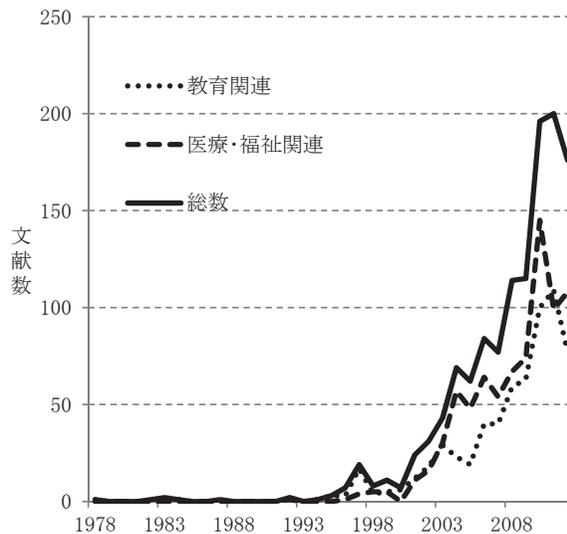


Figure 1 学術論文内に使用される「寄り添い」の経年変化 (前田他, 2013より抜粋)

「寄り添い」の流行の背景には, なにがあるのだろうか。本研究では, 対人援助職が「寄り添い」という用語を使用する背景としてその職業特性に着目している。対人援助の現場では, 専門職が最大限のパフォーマンスを見せても, その結果が良好なものになるとは限らない。そういった際に, 「寄り添い」を使用することによって, 対人援助職は自らの心理的負担を軽減している可能性がある。実際, 朝日新聞記事データベースを用いて「寄り添い」の用法の経年変化について検討した先行研究においては, 「寄り添う」対象が, 具体的なものから, 「心」という実態のないものへと次第に変化し, 震災等の壊滅的な状況 (つまり現実的な対処方法が機能しない状況) に追い込まれた際に急激に使用頻度が高まっていることが明らかとなっている (前田・中西・井川・河野・志和, 2014)。このように, 専門家としてどうしようもない事態に直面した時には, 「寄り添う」以外の方法がなくなってしまう。一

方、専門家が安易に「寄り添い」という用語を使用することは、支援の責任を曖昧なものにする危険性を孕む。「寄り添い」を使用する背景には、支援がうまく機能しなかったときに自らの評価を下げないための自己呈示的な意図があるかもしれない(e.g., “治すのではなく、寄り添う”)。用法の曖昧な「寄り添い」のイメージについて検討することで、援助職の心性についても考察を加えることができる。

以上の議論から本研究では、「寄り添い」という用語が他者にどのような印象を与えるかを援助の結果(転帰)やその他の用語(語句)との差異に着目し、場面想定法実験によって検討した。

方 法

実験参加者 広島修道大学及び広島女学院大学の学生202名(男性66名, 女性136名, 平均年齢19.9歳($SD = 1.41$))を対象に質問紙法で行った。

手続き 実験は2013年10月-2014年4月にかけて行った。参加者は、対人援助職(Aさん)がクライアントに支援を行う場面について記述された短文シナリオを読み、Aさんに対する印象評定を行った。なお、本研究は広島修道大学心理学研究倫理・審査委員会において承認を得ている。

シナリオ 実験参加者間要因として、語句条件(統制/寄り添い/一生懸命)、転帰条件(ポジティブ/ネガティブ)からなる6種類のシナリオを作成した。それぞれのシナリオは、3人の専門職(看護師, 特別支援学級の担任教師, 心理カウンセラー)がクライアントを支援する場面で構成され、専門職の提示順序についてはカウンターバランスを行っている。

印象評定 対人認知に関する一連の研究で開発された20項目からなる特性形容詞尺度(林, 1978)を使用し「あなたがAさんに持つイメージについて回答してください」と教示することで、Aさんの人物像に対する印象の評定を行った。

分析 分析には、HAD version 12.30(清水, 2016)及びR3.3.0を使用した。なお、回答の得られなかった質問項目については欠損値としてその都度分析から除外している。

結 果

専門職(看護師, 特別支援学級の担任教師, 心理カウンセラー)ごとに測定した特性形容詞尺度を1つのデータセットに統合し、探索的因子分析を行った(質問項目は数値が大きいほどポジティブになるように変換)。最尤法、プロマックス回転を繰り返し行い、2つ以上の因子に高い負荷量を持つ3項目を削除した結果、先行研究と同様に3因子構造が抽出され

た（社会的望ましさ； $\alpha = .85$ ，個人的親しみやすさ； $\alpha = .80$ ，力本性； $\alpha = .81$ ）。以降の分析には，それぞれの因子得点を印象得点として使用している。転帰条件，語句条件ごとの印象得点及び標準偏差を Figure 2 に示す。

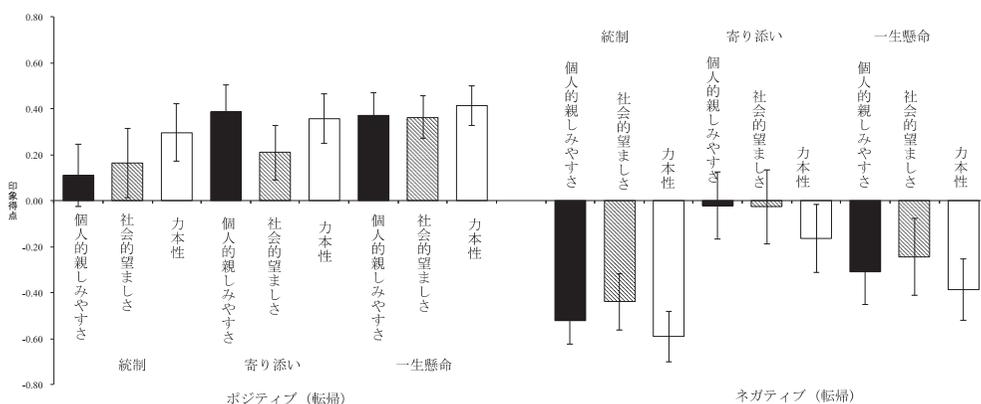


Figure 2 転帰条件，語句条件ごとの印象得点及び標準偏差

転帰と語句の効果について検討するために，転帰条件（ポジティブ・ネガティブ），語句条件（統制・寄り添い・一生懸命）を独立変数，印象得点（社会的望ましさ，個人的親しみやすさ，力本性）を従属変数に配置した多変量分散分析（MANOVA）を行ったところ，転帰の主効果（ $\Lambda = 0.75$ ， $F(1, 185) = 20.07$ ， $\eta^2 = 0.13$ ， $p < .01$ ）及び語句の主効果（ $\Lambda = 0.92$ ， $F(2, 185) = 2.54$ ， $\eta^2 = 0.04$ ， $p < .05$ ）が認められたが，交互作用は認められなかった（ $\Lambda = 0.98$ ， $F(2, 185) = 0.66$ ， $\eta^2 = 0.01$ ， $ns.$ ）。次に，印象得点ごとに転帰と語句が与える影響を検討するために，印象得点それぞれを従属変数とした 2 要因分散分析を行った。その結果，転帰の主効果はすべての従属変数において認められた一方，語句の主効果は，個人的親しみやすさにおいてのみ認められた（Table 1）。個人的親しみやすさにおける語句の主効果の下位検定を行った結果，統制と一生懸命との間には有意差は認められず，統制と寄り添いの間でのみ有意な差が認められた（ $p < .01$ ， $r = .26$ ）。

Table 1 印象得点ごとの分散分析

	社会的望ましさ		個人的親しみやすさ		力本性				
	F	η^2	F	η^2	F	η^2			
語句	2.03	0.02	5.63	0.06	*	2.74	0.03		
転帰	18.61	0.10	**	31.49	0.17	**	56.97	0.31	**
語句×転帰	1.24	0.01		0.67	0.01		1.31	0.02	

$p < .01$ **， $p < .05$ *

考 察

本研究では「寄り添い」という用語が他者にどのような印象を与えるかを明らかにするため、援助の結果（転帰条件）と使用する用語（語句条件）の効果に着目した場面想定法実験を行った。多変量分散分析の結果、転帰条件の主効果が認められた。序論で述べたように、対人援助の現場では、ベストの支援を尽くしたとしても良い結果が認められるとは限らない。シナリオは短文で構成され、専門職が行った援助の内容についての具体的な情報が一切含まれていないにもかかわらず、援助の結果がネガティブであったという理由のみで、専門職個人への評価がネガティブになってしまうことは、対人援助職の援助に対する客観的評価の難しさを示している。

語句の効果が認められた個人的親しみやすさの下位検定を行ったところ、統制と一生懸命との間に差は認められなかったが、統制よりも寄り添いの方がポジティブな印象を持つことが明らかとなった。対人援助職個人に対する親しみやすさという点においては、「寄り添い」を使用することでそのイメージが向上する。このことは、対人援助職にとっては一種の救いとも言えるかもしれない。つまり、援助の結果が良好なものでなかったとしても、その支援の過程を「寄り添い」と表現をすれば、専門職個人の評価は下がりにくい。

一方、この「寄り添い」のポジティブなイメージは、便利な用語としての濫用の危険性を持つ。「寄り添って支援したけどうまく行かなかった」というように、専門職が一種の免罪符として「寄り添い」を使ってしまう危険性もある。極端な例を出せば、先進的な治療を望むクライアントのニーズは医師の治療スキルによって充足されるものであり、未熟な医師による「寄り添い」では解決しないだろう。それぞれ異なった職業倫理を持つ対人援助職（野村, 2011）にとって「寄り添う」とは具体的にどのようなことを指すのか、今後その意味する範囲や明確な定義を明らかにしていくことが求められる。

本研究の課題と展望 本研究は、「寄り添い」という用語が他者にどのような印象を与えるかを明らかにすることを目的とした。しかし、本研究で印象評定を行った参加者は大学生に限られており、本研究の結果のみで、「寄り添い」の持つイメージについて明らかとしたとは言いがたい。また、実際に「寄り添い」が使用される場面やその意図などについては、対人援助職に対するアプローチが不可欠である。今後、調査対象を拡大し、本研究の結果が追認されるかを確認すると同時に、対人援助職が「寄り添い」を使用する際の心性についても検討を加える必要がある。

引用文献

- Charles C, Gafni A., & Whelan, T. (1997). Shared decision making in the medical encounter: What does it mean? (or it takes at least two to tango), *Social Science and Medicine*, 44, 681-692.
- Dworkin, G. (1972). Paternalism. *The Monist*, 56, 64-84.
- Greenhalgh, T., & Hurwitz B. (1998). *Narrative Based Medicine: Dialogue and Discourse in Clinical Practice*. London, England: BMJ Books.
- 林 文俊 (1982). 対人認知構造における個人差の測定 (8)——認知者の自己概念および欲求との関連について 実験社会心理学研究, 22, 1-9.
- 前田和寛・中西大輔・井川純一・河野 喬・志和資朗 (2013). 「寄り添い」とは何か (1)——Cinii を利用した内容分析——中四国心理学会抄録集, 46, 45.
- 前田和寛・中西大輔・井川純一・河野 喬・志和資朗 (2014). 流行語としての「寄り添い」：新聞記事のテキストマイニングによる探索的研究日本社会理学会第55回大会抄録集, 68.
- 野村豊子 (2011). 業務を牽引するエンジンとして ケアマネージャー, 13, 12-13.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 新村 出 (1991). 広辞苑第4版 岩波書店.

付録 本研究で用いたシナリオ

看護師シナリオ

「Aさんは看護師です。Aさんは自分の病院に入院している患者を〔統制：なし／寄り添って／一生懸命〕看護してきました。〔ポジティブ：担当している患者の病状は改善してきました／ネガティブ：担当している患者の病状はなかなか改善しません〕。」

特別支援学級の担当教師シナリオ

「Bさんはある学校で障害のある生徒を担当する教員をしています。Bさんは自分の学級の生徒に〔統制：なし／寄り添って／一生懸命〕指導してきました。〔ポジティブ：担当している生徒は大きな問題を起こすことなく、学校生活を楽しくしています。／ネガティブ：担当している生徒はしばしばトラブルを起こし、Bさんは対応に苦慮しています〕。」

心理カウンセラーシナリオ

「Cさんは心理カウンセラーです。Cさんは自分のクリニックに通っているクライアントに〔統制：なし／寄り添って／一生懸命〕援助してきました。〔ポジティブ：クライアントは最近落ち着いて生活しています。／ネガティブ：クライアントはカウンセリングを受けてもまだ不安定になることが多いです〕。」

Abstract

Effects of *yorisoi* with human service professionals on impression formation: A preliminary study using vignettes

Junichi Igawa, Daisuke Nakanishi, Kazuhiro Maeda,
Takashi Kawano and Shiro Shiwa

In this study impressions regarding “*yorisoi*” (cuddle) with human service professionals were investigated. Participants ($N=202$) assessed their impressions of human service professionals after reading six short vignettes. The two independent variables, outcomes (positive / negative) and descriptions related to the target person’s attitude to the client (control / work hard / *yorisoi*) were controlled. The result of a MANOVA indicated that the main effects, outcomes and descriptions were significant. These results indicated that the target person was evaluated negatively if the client had negative results, whereas if the target person’s attitude is described as “*yorisoi*”, his or her evaluation increased.

key words: *yorisoi* (cuddle), impression formation, human service

